フィールドデザイン論研究

研究代表者　古谷　誠章
（創造理工学部・建築学科・教授）

1. 研究課題

日本社会では情報技術の発達や産業構造の変化、人口移動等による社会・経済情勢の変化に伴い、社会構造が急激に変化している。この変化に伴い各地の住民の生活は絶えず変化を求められており、しかしその変化に対応できず産業の衰退や人口減少といった問題に直面している市町村は少なくない。本研究では、行政区等における目に見えたコミュニティや範囲を超えた広域的な人・文化・地域を「フィールド」として捉え、社会経済情勢の変動と共に変化する住民生活や「フィールド」がもっている価値を発見し、それらを動かしているメカニズムを解明することで、各地の住民の生活が続き発展することが可能なデザイン手法の模索と提案を行う。

行政区を超えた広域な地域「フィールド」づくりの推進や生活構築の観点から、地域に現存するリソースの見直し・住民のまちづくりへの参加等を通じて、地域リソースの有効な活用方法に関する具体的設計指針の改革が不可欠となっている。

これら地域に関する問題に意欲的に取り組もうとする地方都市や建築・都市デザイン関連機関からの委託により具体的な実践に基づくこと、および本研究組織で過去行った10を超える事例の整理から固有な手法・提案から、フィールドデザイン論に展開していく。

2. 主な研究成果

2-1. 森林のまち“吉野”における吉野材を活かした教育プログラムの開発
2-2. 上北山村の豊かな森を活かした地域活性化のための人材育成事業に係る調査研究

2-1. 森林のまち“吉野”における吉野材を活かした教育プログラムの開発

吉野地域の魅力を活かした森林・木材利活用等を学ぶことができる、県内の児童生徒にとって魅力的な教育プログラムを開発し、次代の吉野地域の振興を担う人材の育成を目的とする。

2-1-1. 木、吉野地域について学ぶ教育目標の検討

本研究では、吉野にある専攻科だからこそ学べることを、奈良県外で建築を教育し学ぶ本研究室による客観的視点より検討し、これからの学生に学んで欲しいことを「木、吉野地域について学ぶ教育目標」として以下９つの項目にまとめた。

「A/なぜ木がいいのか」「B/木の空間１：風土に学ぶ」「C/木の空間２：伝統に学ぶ」「D/木の空間３：新しきを知る」「E/木の川上を知る」「F/木の川中を知る」「G/木の川下を知る」「H/木の将来に何が可能か」「I/木を用いた制作実習・プレゼンテーション」

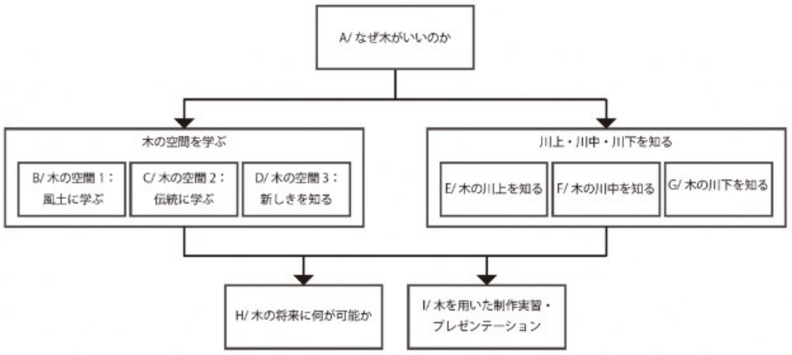

fig1. 木、吉野地域について学ぶ教育目標ダイアグラム

本提案の中には、過去 10 年間通して行ってきた本研究室と奈良県との連携事業での知見を活かし、木や林業、吉野地域を再考したこと、また、本研究室の修士学生が、吉野地域や木について学ぶときに行ってきた学習を参考に作成した。9 つの項目では、現代ではあまり触れる機会のない木に対しての基本知識を学ぶところから初め、木の空間と吉野地域のフィールドワークを通して知識を深めることで、今後の建築や木材産業への提案につなぐことを検討した。また、現行の専攻科のカリキュラム案と比較を行い、特に吉野地域でのフィールドワークや制作実習、プレゼンテーションといった地域に密着した授業提案を作成した。学生のころから地域に密着した学習をすることで、産業関係者と知り合う機会を増やし、より多くの視点から木材や建築についての知見を得ることになる提案とした。

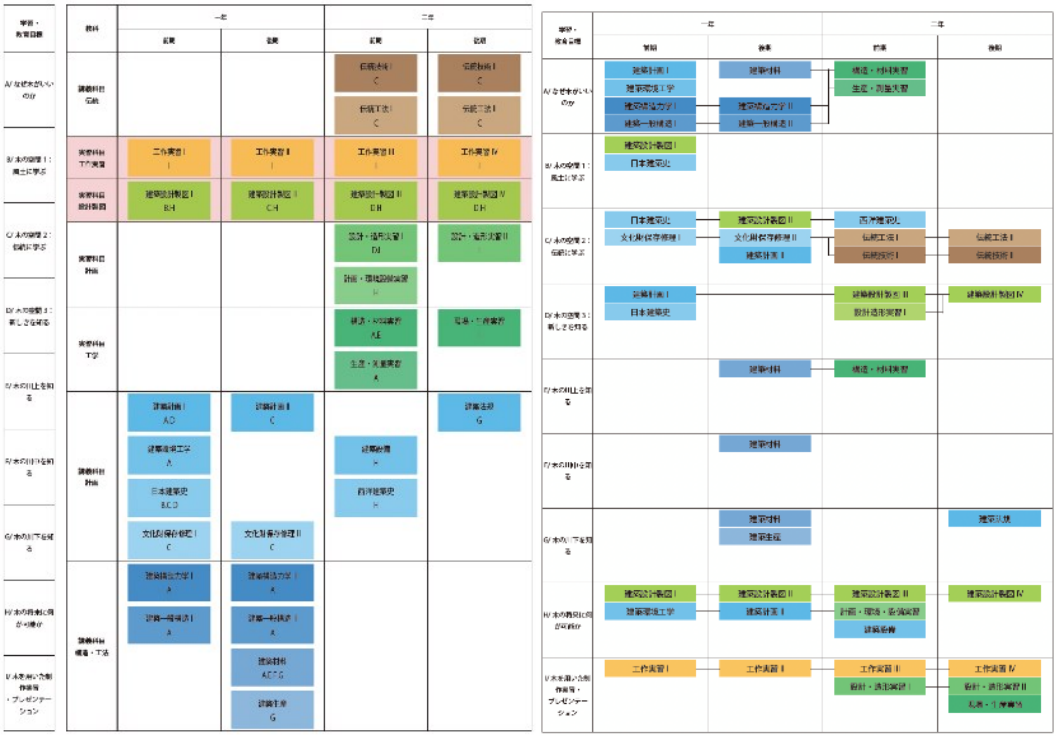

fig2. 木の教育目標とカリキュラムの対応(左),教育目標を達成するために必要な授業科目の流れ(右)

2-1-2. 吉野高校、奈良南高校へのレクチャーの実施

教育目標の検討にあたり、奈良県立吉野高校、及び奈良南高校の建築・土木を専攻する生徒に対して「木の魅力を活かすデザイン」と題してオンラインレクチャーを実施した。また、レクチャー後に吉野高校にアンケートを行った。吉野高校は、今回の研究対象地にある学校であり生徒は実際に吉野地域に通っているが、木について、また吉野材について、身近にある環境に目を向けるようなことが中々できていないという回答が多く見られた。今後の活動としても木について興味をもち、活用することに少しでも取り組んでみたいという意見があり、レクチャーなどを通して、少しでも興味を持ってもらうことが重要であると考えた。

2-2. 上北山村の豊かな森を活かした地域活性化のための人材育成事業に係る調査研究

本研究は早稲田大学理工学術院総合研究所と上北山村が、産業、文化、教育、地域づくり等の分野において地域振興および相互の交流を深めるとともに、地域の活性化と人材育成に寄与することを目的としている。今年度の研究活動は上北山村の現状把握を目的とした調査研究が中心であり、翌年度以降の研究活動の基盤とするためのものである。

2-2-1. 現地調査

上北山村の自然資源や文化資源を把握するために四回の現地調査を行った。役場の方に案内してもらいながらの調査や、学生によるフィールドワークの他に、地域住民を対象とするヒアリング調査も実施した。また、古民家の実測やフォトグラメトリの作成も行った。

fig1. 製材所の見学

fig2. 旧保育園の見学

fig3. 地域住民に対するヒアリング調査

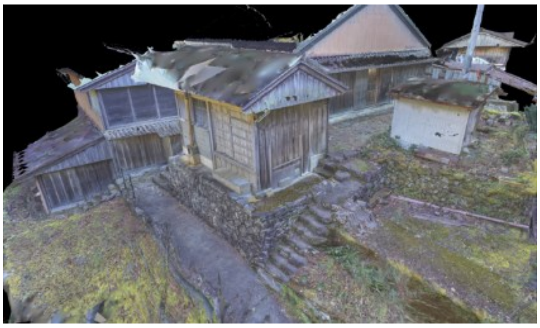

fig4. 古民家のフォトグラメトリ作成

2-2-2.上北山村の豊かな森を活用した地域活性化のための生物・文化的資源調査

本研究を進めるにあたり、地域の環境特性及び現状を把握するために生物調査を実施した。研究を中心的に進める予定である小処エリア、和佐又エリア、河合集落を中心に、生物資源調査と文化的資源調査を現地調査又は文献調査として実施した。

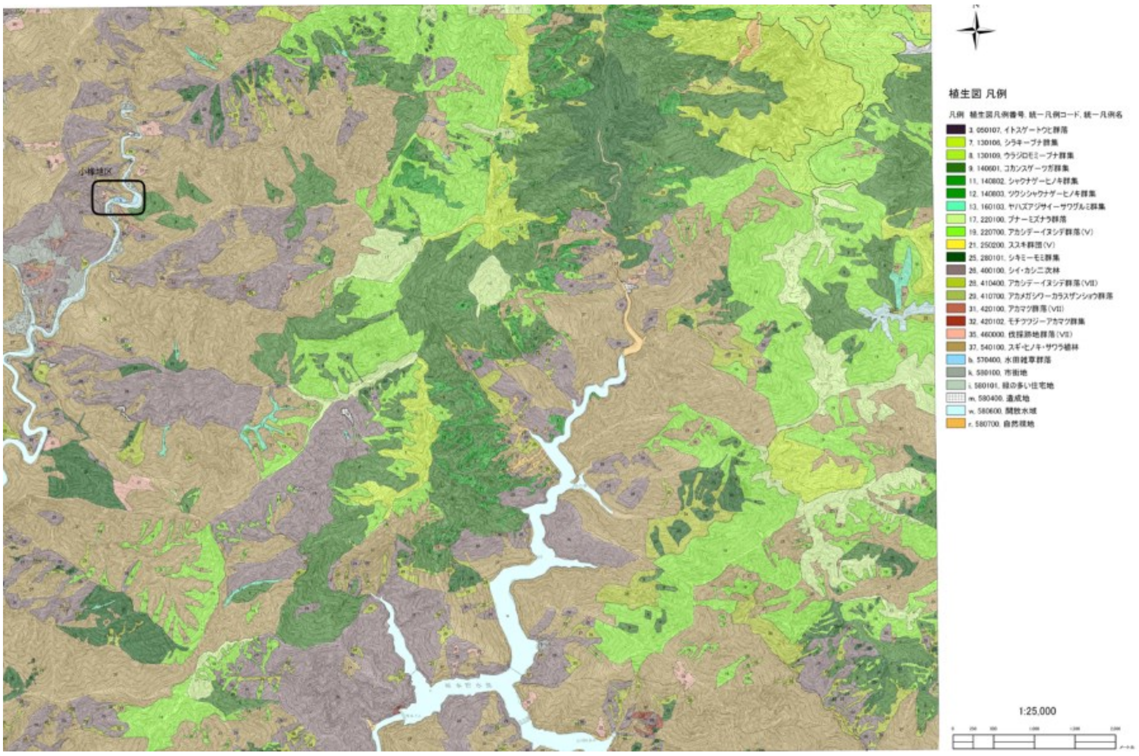

fig5. 河合集落周辺の植生図

2-2-3.継続的研究のためのマスタープラン作成と基礎調査

現地調査などの調査結果を踏まえ、マスタープランを作成した。また、今後の継続的な人物育成のために木育ワークショップの先進事例を収集した。

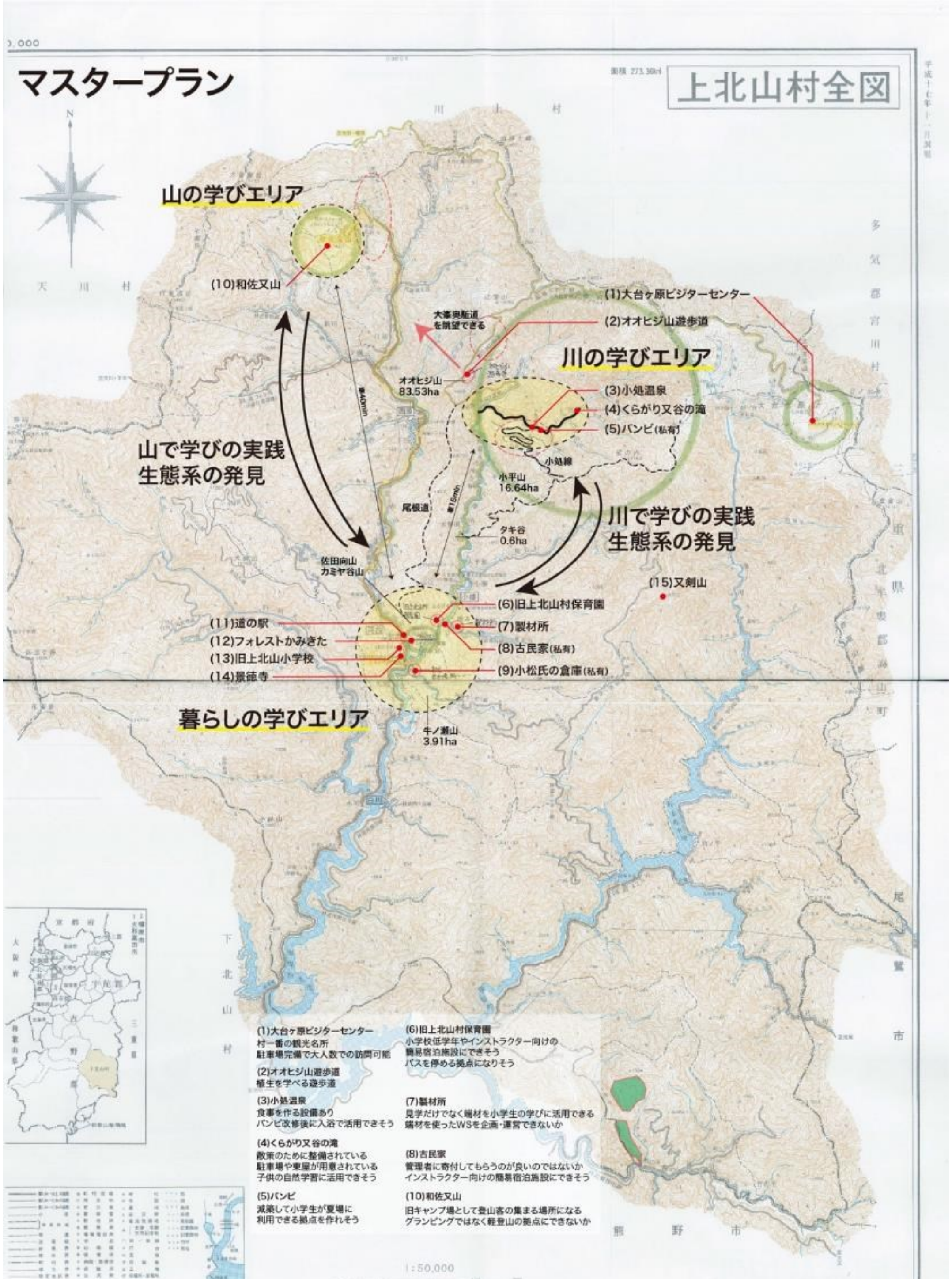

fig6. マスタープラン

3. 共同研究者

根本　友樹（創造理工学部・嘱託研究員）

王　　薪鵬（創造理工学部・講師）
宮嶋　春風（創造理工学部・助手）
池田　理哲（創造理工学部・助手）
陳　　麟　（創造理工学部・助手）

4. 研究業績

特になし

5. 研究活動の課題と展望

5-1. 森林のまち“吉野”における吉野材を活かした教育プログラムの開発

本研究では、新型コロナ感染症拡大の影響により、実際に生徒等と本研究室学生とのワークショップを行うことができなかった。実際に吉野地域でのフィールドワークや制作活動を共同することで、より細かな授業提案まで結びつけることができたように思う。また、実際に教員との意見交換なども行うことができなかったが、提案内容の説明をする機会を設けることで、授業に本提案を盛り込んでもらえたら幸いである。また、今後の展開として、吉野地域の産業関係者や奈良県の建築家などとの交流を特別講義や課外授業を通して築き、最終的にはコンソーシアムの作成を目標にすることで、建設業や林業、関連産業へ興味を持つ学生の育成に繋がると考える。また、奈良県内の建築を学ぶ学生が加われるプログラムとなっていくことで、木や吉野地域、奈良県産材を活かした建築や空間に興味を持ってもらう一助にもなるだろう。多くの学生に、木のこと、木の空間のこと、吉野林業のこと、吉野地域のことを知り、触れることで、木や吉野地域のファンになってもらい、卒業した後も木の活用を試みてもらえることで、吉野材活用に繋がっていくことを願う。

5-2. 上北山村の豊かな森を活かした地域活性化のための人材育成事業に係る調査研究

今年度は研究活動の初年度として、現地調査を中心に活動した。調査の結果として、村の自然資源の他にも古民家や活用されていない旧保育園やホテル跡などの建築資源も明らかになった。今後はこれら調査結果を踏まえた具体的な提案を行なっていきたい。

研究の課題としては現地への道のりが遠く、頻繁に訪れることが難しいことが挙げられる。今後はオンラインミーティングなども積極的に導入するなど、村役場の方とのやりとりを円滑にするための工夫が必要であると考えられる。